栄光の混成競技２

★インターハイ表彰台

春高陸上部からは高校総体で幾度もの混成競技入賞を果たしている。

１９６３年　第３位　後藤秀夫　五種競技 3326 点（高校新記録）
１９６４年　優勝　　後藤秀夫　五種競技 3369 点
１９７８年　第２位　大塚　寿　五種競技 3761 点（埼玉県高校記録）

後藤先輩は幅跳びで国体３位も獲得しており、もちろん背面跳びソフトマットでない時代に高跳びも１ｍ９１という怪物ぶり。埼玉新聞に「３０年に一度の逸材」と記載された。弱点なし、砲丸も一般選手なみにこなすモンスターだ。
それは大塚さんも同じ。ハードル、砲丸、高跳びでも個々にインターハイ出場できる能力を持つほど。

大塚さんの内分けは１００ｍ１１秒５　砲丸１４ｍ３４　１１０ｍH１５秒３
高跳び１ｍ９１　４００ｍ５２秒３

★８種競技時代

大塚さんの活躍した年を区切りに、混成は一度インターハイ種目から消える。過密な試合スケジュールで掛け持つ選手の負担もあったのであろう。特にシニアの１０種に近づくには高校は８種、中学も４種に移行せざるを得なかったと思われる。

５種時代は基本、跳躍選手が圧倒的に有利であった。高跳び、ハードルの全国的な選手が、秋に開催される全国混成でも優勝を飾っていた。８０年代までは、カールルイスに代表されるように、１００ｍ、幅跳びの掛け持ちは珍しくなかった。跳躍、ハードルなどで優秀な選手は、類似した種目でもトップクラスであったのだ。たとえば中学時代の為末大さんや、池田久美子さん。走っても跳んでも国内に敵なし！・・・そういうスタイルが活躍する時代でもあった。

８種競技時代になってそれは大きく変化した。現在の高校生競技会では短距離、跳躍、ハードルの掛け持ちはほとんど見られない。早い段階から「専門種目化」してきたのだ。

そして混成競技は、総合力タイプの選手が中心になってきた。１０種競技の発想に沿ってきたのである。１５００ｍまでこなす必要がある選手に、砲丸投げ、やり投げはきつい。さらに１１０ｍH（高さ１０７ｃｍのハイハードル）を求めるのだから、８種競技では「一点突出」なタイプが減るのは必定であった。

県大会の菅沼の８種混成内訳
100m11.54-幅跳び 6m48-砲丸 9m80-400m52.14
110mH16.47-やり投げ 41m67-高跳び 1m80-1500m4:30.33

春高記録１２ポンド砲丸時代に作った霜越と比べてみよう。

２０００年　全国総体混成競技大会（８月１５～１６日：岐阜・長良川）
１１位 ５３４１点 霜越壮裕　　（春高新記録）
１００ｍ（１１”５６） 走幅跳（６ｍ３３） 砲丸投 12P（１１ｍ９８）
４００ｍ（５０”２３） １１０ｍH（１６”８１） やり投（４７ｍ５９）
走高跳（１ｍ８７） １５００ｍ（４’４４”９５）

霜越（写真左）は、いつなんどきでも走って跳べる万能タイプ。おそらく球技なども優秀な身体能力。（この日も高跳び１ｍ８７ｃｍ越え、すぐリレー・・・１０年以上前の春高会チームにて）

霜越の高校時代は 400mR, マイルメンバーであり、砲丸、やり投げの入賞も多々ある。完全なマルチぶりを発揮。特に４００ｍ５０秒２３というのは素晴らしく速い。

今回の菅沼の７００点越えの得意種目は、１００ｍ、４００ｍ、１５００ｍ。１５００ｍの走力は素晴らしいものがある。逆に４００点台の記録は砲丸とやり投げ。ということは、典型的なランニング優位型。この特徴を活かしてほしいものだ。

あと一か月あまりで急激な変化はないはず。コンディショニングが最重要項目になるのであろうが、なんといっても高校生。どの種目がどこまで伸びるかは未知数だ。

どちらにせよ、混成の達人・大塚さんの元で、プランに沿って頑張ってほしい。

我々OB は今年も学生の活躍を誇りに思う。
そして菅沼自身が、試合を楽しんでくれる事を一番に望むのは、いつの時代も変わりがない。

（この２年くらい、院外雑務に追われ、本当にバテバテの・・・筆　３７回　　のもと）